

ラオス研修レポート

研修日：平成22年12月21日～24日

医学科1年次

学籍番号：104141A

氏名：日暮 悠璃

1、日程

12/21

07:15 沖縄発

21:00 ビエンチャン着

12/22

国立ラオス大学訪問

国立ラオス大学附属小学校訪問

ラオス健康科学大学訪問

セタティラート病院訪問

ラオス健康科学大学学生との交流会

12/23

セタティラート病院訪問

歯科ユニット贈呈式

手術見学

観光

21:45 ビエンチャン発

12/24

12:25 沖縄着

2、感想及び学んだこと

私はこの研修によって多くのことを学びました。まず第一に英語の大切さです。日本にいるときは正直に言えば英語が話せなくても何とかかなると思っていました。しかし、こうして初めて海外に行ってみると、英語はコミュニケーションの中心で、言いたいことがあっても英語で表現できず、とてももどかしい思いをしました。そんな私たちとは逆に、ラオス健康科学大学の学生は英語もとても流暢でした。そのうえ、フランス語も話せると聞いて、このままだ何となくだらだら英語を学んでいてはいけないと感じました。今度海外に行くときにはせめて自分の言いたいことを表現できるようにもっと身を入れて英語を学んでいこうと思います。

第二に、日本の医療環境がいかに恵まれているのかを学びました。ラオスに行く前の記者会見の際に日本の医療とラオスの医療では全然違うと言われましたが、自分で見てみて本当に全然違い、ショックを受けました。日本でも医療過疎が問題になっている地域はあります。しかしそれでもやはり日本の医療環境は恵まれているのだと感じました。日本ではいくら自分の住んでいるところが医療過疎地域だとしても、本当に見てもらいたい病気であれば、時間はかかりますが大病院に行けば診てもらうことができます。しかし、当たり前のことではありますが、ラオスのようにそうではない国もあるのだということに改めて気付かされました。口唇口蓋裂は直接命にかかわる病気ではありませんが、QOLを著しく下げってしまう病気です。ラオスで初めて口唇口蓋裂の患者さんを見て、当たり前になっていた日本の医療環境が恵まれたものであること、これからもこのような医療協力を続けていくことの重要性を感じました。また、日本の医療環境は充実

したものではありますが、逆に医師と患者の良好な関係という面ではラオスでの医療協力から学ぶこともあるのではないかと思います。診察の見学をさせていただいているときに、先生が患者さんにとっても感謝されていて日本でもこんな風に患者さんと良い関係をつくるように努力していくべきだと感じました。

また、砂川先生の「機器が少なかったりと環境があまりよくないからといってレベルを下げた医療をするのではなく、沖縄ですのと同じようなレベルの医療をすることを心がけている。」という言葉聞いて将来離島に行ったときに機器等が少なくてもその中で自分にできることを精一杯やろうという気持ちが強くなりました。そのためにも、これから良い医者になるために色々なことを学んでいきたいです。

今回のラオス研修は新たな発見や価値観を変えるような出来事が多々ありとても実りあるものになりました。このような機会を設けて下さった先生方に感謝するとともに、今回の研修で学んだことを今後活かしていきたいと思えます。